

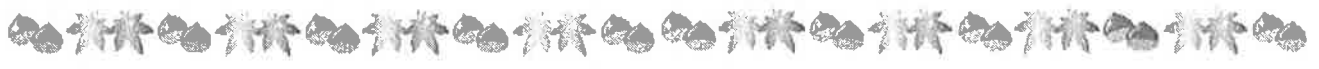
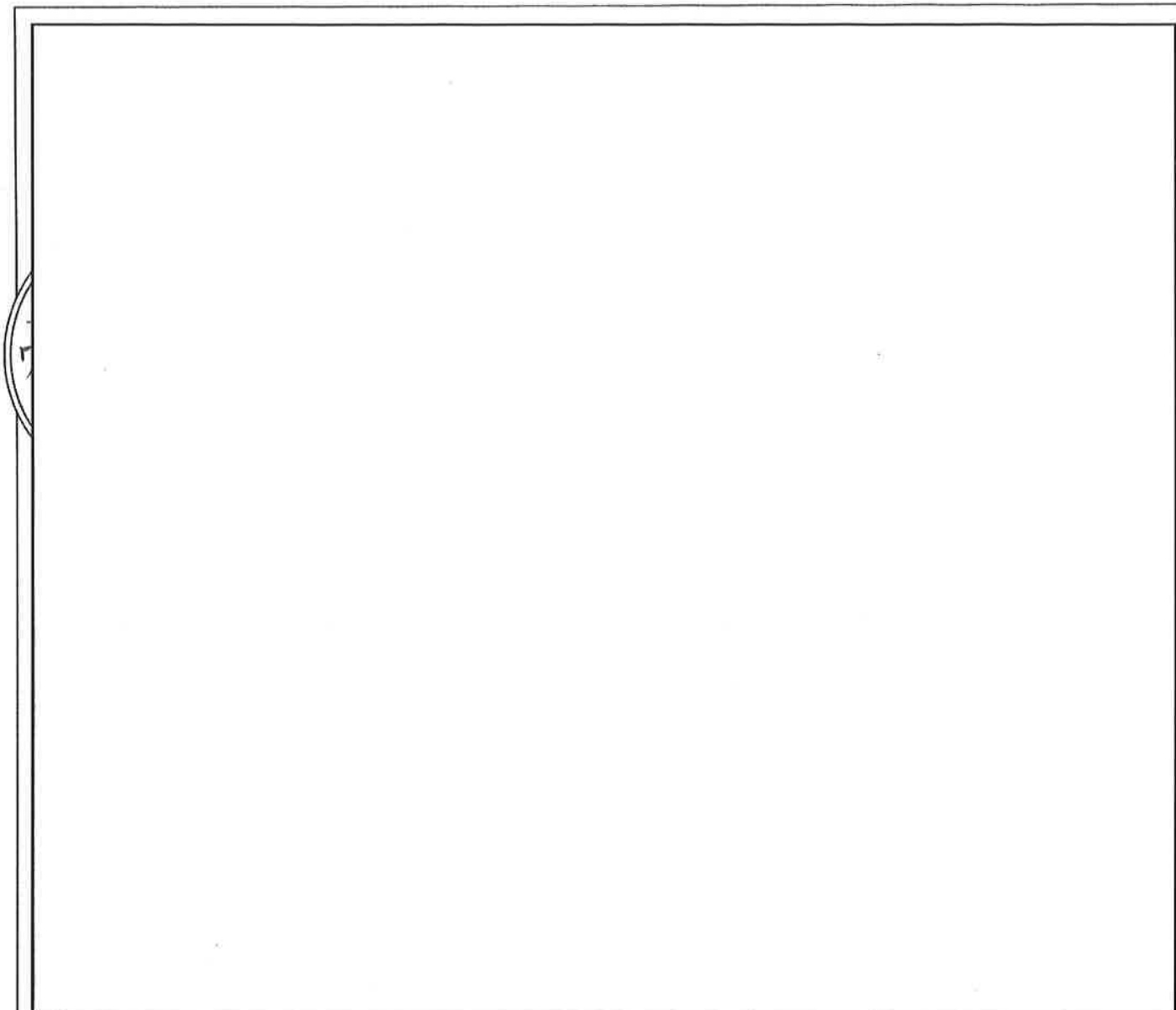


2011年11月15日 発行

2011年秋号

<第17号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 works-union@y3.dion.ne.jp http://www.v-aid.org/union/



『最近の私』

以前は3時に早退をしていましたが、最近、和に4時までいる理由はちよつとでも工賃を稼ぎたいからです。

最近、休みの日にヘルパーさんと個人活動で動物園とか、水族館とかあたらしいショッピングモールとかに行くようになって楽しいです。クラゲや、イソギンチャク、色んなオコゼがいたり、いわしやアジもいたし…。もつと行きたいし、色んな所にも行ってみたいです。

いつか、ヘルパーさんと東京、ディズニーランドにも行ってみたいので、毎月工賃から1000円を積み立てています。乗り物には乗りたくないけど、パレードが見てみたいから。

夢はハワイやオーストラリアなんかもいつかは行ってみたいです。ダルビッシュやジョニーデップのようなカッコいい恋人候補はなかなかいませんね。



金井 孝枝

企業との歩み

ワークス歩は、平成十年四月一日に柳トスの工場内にワークス歩として開所されました。現在の利用者は、男性8名、女性6名の計14名です。

平成二十年の八月に、東大阪にある(有)柳化成の工場内に場所を変え、従来通りハンガールのウレタンがけやチップ付けの作業を行っています。

ワークス歩は、企業の2階にスペースを借り、毎日会社から注文を受けて作業をしています。

作業場のすぐ外にある倉庫には所狭しと箱が積まれ、その中からその日に必要なハンガーを探し、作業場に運んでいきます。

朝に用意されたハンガーが次々と作業台に出され、台を囲む利用者さん達が、一斉に勢いよくウレタンをかけていきます。台の上からみるみるハンガーが消えていく様子は、見ていてとても気持ちの良いものです。毎日1万本近くのハンガーにウレタンをかけますが、

ウレタンがけだけでなく、検品・箱詰めまですべて利

ります。その度に必要なウレタンを、倉庫からせせせと取ってきてくれる利用者さんがいます。

彼は歩に入ったばかりの頃、ウレタンを上手くかけることができませんでした。ウレタンを破ってしまい、

ポロポロと悔し涙を流すこともありました。それでも負けず嫌いでいつも一生懸命な彼は、毎日こつこつと取り組み、いつしかとてもスムーズにウレタンをかけられるようになりました。

また、何事にも一生懸命なぶん色々なことが気になる、当初は他の利用者さんや職員と衝突することもありました。

しかし今では、時にはざわついた作業場の雰囲気や叱咤激励し、時には自分より後に歩に入ってきた利用者さんに「がんばりや」と声をかけてあげ、皆に慕われる存在になっています。

ある利用者さんは、職員でも難しい作業を、手慣れ

た手つきでこなします。彼女が用事で欠勤するときは、会社にお願いをし、その納期を少しずらしてもらうほどです。

時には、社員さんからも頼りにされることがあります。ハンガーがどの箱ならきっちり入るのかを、彼女に尋ねに来るのです。とまどうことなく答える彼女の姿は、頼もしい限りです。

また、早退する人がいると、「その人のぶんまでがんばらなくっちゃ!」と、いつも前向きに強い意志を持つてがんばる彼女です。

そんな彼女は、ほんの少しの失敗をした時でも、「私のばか、ばか、ばか!」と自らを叱責します。就労経験のある彼女にとって、作業の一つひとつが、責任を持つて取り組むべきものなのでしょう。

忙しい時期は、午後に入ることもしばしばです。残業が決定になった瞬間

も、利用者さん達は嫌がるそぶりも見せず、当然のように目の前のハンガーがなくなるまで仕事を続けます。

長年、企業の中で働いてきた利用者さん達です。「仕事なんだからやらなければ」・「そんな意識が自然と働くのでしょうか。」

売り上げを少しでも伸ばすために、倉庫にある在庫を見て「これもやりましょう」と言う人や、毎日のように売上表を確認し、その日の売り上げに一喜一憂する人もいます。

歩ができて十三年。中には立ち仕事が多くなってきた利用者さんも出てきました。それでも、「高い工賃をもらっている」「会社の一員として働いている」というプライドが、皆を支えているのかもしれない。

先日、還暦を迎えたある利用者さんは、時おり腰痛を訴えながらも、「65歳までがんばります!」と皆の前で堂々と宣言していました。

(野々村)

企業の中で働く それが 彼らの誇り

「働く」

企業就労の試みに幾度か 失敗した人たちが
また その途中で 断念した人たちが
それでも なお企業で働きたいと思う人たちのために
企業の中に彼らの働く場を数ヶ所作りました
15名以下の小規模集団を組み
2名以上の支援職員がいっしょに働きます
工賃（給与）は労働による売り上げを全員で分配します
更に 単独の企業就労を再び目指す人に
職員は 支援を続けます

パンフレット よい

前回「歩」を特集したの
は、平成十六年秋、小規模
通所授産施設「ワークス歩」
の時だった。

当時の「ワークス歩」は、
大阪市東成区東小橋にある
サンワ株式会社の本社ビル
の2階の一部を借りて、15
名の利用者が、職員2名の
支援を受けながら、ハンガ
ーの加工に懸命に励んでい
た。

型事業所「ワークス利」（本
場 ワークス利、分場 歩、
分場 匠）と就労移行支援
事業と就労継続支援B型事
業を行う「ワークス集」の
2事業所に再編した。

「歩」の利用制度は変わ
ったが、利用者の支援環境
に変化はなかった。

しかし、平成十九年九月、
サンワ株式会社の経営悪化
に伴い、通いなれた場所か
ら、東大阪市柏田西の「有
限会社柳化成工業所」内へ
の移転を余儀なくされた。

東大阪市まで利用者は一
人で通えるのか？ 仕事は
今までどおり確保できるの
か？ 通いやすい場所、で
みんなのできる仕事を提供
してくれる企業を開拓しよ
うか？

平成十八年 創設者「山
川宗計」氏の急逝、と「障
害者自立支援法」の施行。
ワークスユニオンは、そ
れまでの5ヶ所の「小規模
授産施設」としての日中支
援事業の運営を、国の制度
に基づいた就労継続支援B

分の会社に来て、今までど
おり仕事を続けてほしい。」
との誘いもあるのだから、
移転しようとの結論に至る。

遠くまで通いたくない何
名かの利用者は、別の事業
所に異動したが、ほとんど
の人が、東大阪市内の「有
限会社柳化成工業所」まで
通うことを決意した。

何日にも亘る通勤練習、
移転の準備、引越等、大忙
しの夏を乗り越え、広く快
適になった新しい「事業所」
での秋を迎えた。

平成二十年四月 日中支
援事業の再編成を経て、
「歩」は現在、「ワークス
集」の施設外就労の現場と
して運営している。

ワークスユニオンの「施設
外就労」の現場は、この「柳
化成工業所」内での「歩」
を含めて3ヶ所、利用者22
名となっており、それぞれ
の企業内で、一人ひとりの
利用者が、自分の持てる力
を存分に発揮している。

突然の移転話に、保護者も
利用者も、職員も大いに戸
惑った。

何度かの臨時の保護者会
を開き、場所は遠くなって
も、社長より、「今までの仕
事ぶりを評価した上で、自

私たちワークスユニオン
の目指すことは、一人ひと
りの利用者の「満足感」と
「充実感」を感じられる生活
の実現。

「たくさん工賃が欲しい」、
「企業の中で働きたい」、
「仲間と楽しく働きたい」、
「あせることなく自分のペ
ースで働きたい」……
それぞれの利用者で、日中
支援の現場に望むものは異
なる。

「歩」は、仲間や職員と
だけの「施設」ではなく、
「企業」の中で社会の息吹
を感じながら働きたい人た
ちの事業所。

「時には、残業しなければ
ならない時もある」、
「時には、会社の人に叱られる
事もある」
「時には、社長の
お目玉を食らうこともあ
る」……

でも、だからこそ、社会
の一員であることを強く感
じられる。

そこで働くことが、彼ら
の誇り。

（南石）

余暇活動の拡がり

9月より、金曜日の夜に大正スポーツセンター（アゼリア大正）の体育館を借りて、スポーツ活動を始めました。

きっかけは、「体を動かす楽しさ」を伝えたいという職員の提案。それを受け、体を動かすきっかけ作りとして、8月にケアホームで行ったミニ夏祭りにおいて、盆踊り大会を企画。その結果、盆踊りは大盛況。地域の盆踊り大会にも参加するほどノリノリになった利用者さんもあるほどでした。

この「きっかけ」を継続したものにするため、体育館でのスポーツ活動に繋がっています。

活動は、元職員で「ノーマライズスポーツ塾」代表の鳥居隆史さんにもお手伝い頂き、「ふうせんバレーボール」に取り組んでいきます。このスポーツは、チーム全員がボールにタッチした後、相手コートにボール

を返すルールで、全員参加をモットーとする新しいものです。力の入れ具合などにより、風船が移動する方向や高さに差が出るなど、バレーボールとは違った面白さがあります。活動中は、学生ヘルパーが持ち前の運動神経の良さを発揮する場面があつたり、普段はおつとりしている利用者さんが、眠らせていた運動神経を目覚めさせて機械に動いたり

。普段とは違う光景が広がっています。活動する職員の目標は、ユニオンでチームを作り、全国大会に出場すること。とはいえ、利用者さんにとってのスポーツを知ってもらわないと話が始まりません。今後は、余暇活動での活動企画を増やしたり、事業所対抗の試合などを企画していきたいと思っています。スポーツ活動が、体を動かすきっかけになり、そして、自分自身の健康について考えるきっかけになればと思います。

(高橋)

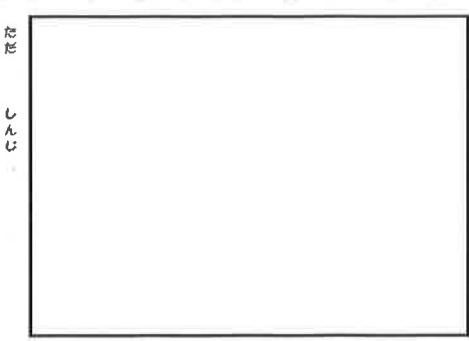
職員紹介

多田 真司 (左) OMC

三度の飯よりお酒と中島みゆきが好きという彼。彼女がデビュー当時、彼は小学校低学年。その頃からファンだそうで、なんとも渋い子供だったようです。

ユニオンに入社して丸五年。それまで製造業に長く携わり、物づくりという仕事にこだわりを持って取り組んできました。今の仕事には、古き良き時代の日本の物づくりの形があると彼は言います。笑顔でそこに居てくれる存在は、利用者に安心感を与えてくれます。

佐々木 格 (右) OMC
入社して丸五年。日中は



利用者と一緒に仕事をバリバリとこなす彼ですが、家庭に帰ると四歳になる娘を持つ優しいパパの顔に戻ります。以前は児童養護施設に勤めていたこともあり、その経験や子育ては、今の仕事の中にも活かしているようです。「若い職員には負けてられん」という静かな言葉の中に、彼の強さを見えた気がしました。今後の活躍が楽しみです。

萩原 麻琴 (中央) 歩

大学を卒業したばかりの社会人一年目二十三歳の彼女ですが、一年目とは思えないほど落ち着いて仕事に取り組んでいます。彼女のお母さんも同じような仕事に勤めていたため、施設にはよく遊びに行く環境で育ったことが大きいようです。「もっと先を見通した行動がとれるようになりたい」「利用者さんにとつての楽しみを増やしたい」「」が今の彼女の目標とすることです。職員として奮闘中です。(原・黒川)

編集後記

▼ワークスユニオンの作業所(就労継続支援B型)は、物をつくる人の集団、「働く」をテーマに支援してきました。▼しかし、十年が経ち集団の形も変わってきました。仕事中心でバリバリと働いている人がいる一方、身体的理由により一日を通しての仕事が難しい人、階段の上り下りが困難な人、仕事より遊びたい人。様々な利用者が一つの集団に混在するようになってきました。「働く」ことだけでは、集団が成り立たなくなってきたのです。▼今、ワークスユニオンでは、生活介護の事業所を立ち上げる話が出てきています。その中心は、場所や集団、何を中心とした事業所にするのかという問題が話し合われています。課題はいっぱいですが、利用者には待つてはくれません。急がなくてはなりません。(M)